2013年度日中学院校友会中国旅行「**河南省古都に歴史を訪ねる旅**」

2014年3月8日

題字は龍門石碑体

今回の旅は中原に行くことにした。寒い時季を避けるために，2014年度に入ってからの4月に催行することで企画したが，清明から穀雨の時季なので雨の心配はある。

今回立案した河南省は，中原の地といわれ，上古代から中世まで幾多の王朝が都を置いた場所である。その数ある遺跡の中で，世界遺産では安陽の「殷墟」と洛陽の「龍門石窟」の二つの有名な個所を訪れる。

さらに，鄭州の河南博物院で多くの古代からの遺物を見学し，七朝の都と謳われた開封では，北宋の繁栄を再現したテーマパークを散策する。

なお，食に関しては，残念ながら河南省の料理は，前回の広東料理や第16回の五台山の精進料理，第15回の厦門の「佛跳墻」にはとうてい及ばない。洛陽の水席料理の名菜である「牡丹燕菜」にしても，日本人旅行者の評判はそれほど高くない。以下，食べ物を除いて旅行予定先の情況を簡単に紹介する。

河南省の概略図

一　河南省の地誌

☆ 位置と地形

河南省は中国大陸の中央に位置し，時計回りに北側から河北省･山東省･安徽省･湖北省･陝西省･山西省の六つの省に接し，山地から黄河の沖積平野に跨がる通常中原と言われている地域にある。南北約 550km，東西約 580km に拡がり，広さは約 167,000km^2 である。

河南省は，黄河が南から東に向きを変える潼関付近を西の付け根とし，百合の花のような形を東の平原に拡げた，西高東低の地形をしている。

省の西の地域は，北から連なる太行山脈の南端の山々とそれにつながる伏牛山になっていて，陝西省とはこれらの山地で隔てられている。太行山脈を貫いた黄河は，省都鄭州を要に扇状地を拡げている。山西省とは太行山脈と黄河で隔てられている。黄河は歴史に残る分でも，7 回も河道を大きく変えている。

なお，陝西省と四川省を分ける秦嶺山脈や河北省と山西省を分ける太行山脈は，ヒマラヤ造山運動の余波として出来た大山塊で，太行山脈は西北部の中国を東側の平原と西側の草原に分けている。

省の北側は，河南省という名称に反し，黄河の北側の安陽まで拡がっており，黄河の南に位置する山東省に対しては，何と黄河の北岸に対峙する。河北省および東側の山東省の南部や安徽省については，明確な自然境界はない。

省の南側は，湖北省と平野でつながっている。南端には桐柏山と大別山という二つの山地があり，湖北省や安徽省との境をなしている。この山地を水源とする淮(Huái)河が安徽省につながる平原を東に流れている。

☆ 都市･人口

大きな都市としては省都が鄭州で，他の古い都としては洛陽･安陽･開封が北部にある。その他歴史に名が上がった都市は，許昌･南陽などたくさんある。さらに，今回の旅行からは外したが，鄭州と洛陽の中間にある五岳の雄，中岳嵩山(Sōngshān)に連なる少室山の山麓には，拳法で名高い少林寺がある。

人口は 9,300 万人(2011 年)で，広東省にトップの座を奪われたが，永らく中国の各省市自治区の中で人口最多であった。鄭州市の約 900 万人を初めとして，地級 17 市の半数以上は人口 500 万人を越えている。

なお河南省の一字名は「豫(Yù)」で，尚書や礼記にある古代の九州の一つ豫州が位置したのに由来する。

☆ 交通･経済

河南省は，古代より東西および南北の交通の要衝にあるため，陸運･水運が発達しただけでなく，春秋最後の四大会戦の晋と楚の鄢陵(Yānlíng)の戦いや東漢末の曹操と袁紹の官渡の戦いなど，決戦場ともなった。

鉄道や高速道路は，鄭州で東西と南北が交叉していて，全国一の貨物ターミナルがある。北京－広州間を 9 時間 14 分で結ぶ「京廣高鉄」に乗ると，北京西駅から鄭州東駅までは約 700km，3 時間 20 分で着く。今回移動に高速鉄道を使わなかった理由は，首都空港から北京西駅までの交通渋滞がひどく，さらに PM2.5 が悪化すると道路が閉鎖されて渋滞で遅れるだけでなく，健康被害も生じる虞がある故である。

北の海河と南の銭塘江を結ぶ大運河の開通で黄河との交差点になり，南方の物産を都に運ぶ水運が，隋や唐の都の繁栄を支えた。もちろん宋･元や明･清の時代も流通の大動脈であった。

河南省の経済は古くから農業に依存しており，現今では貧乏省の代名詞ともなっていて，売血によるエイズが蔓延した村もある。資源としては石炭の生産量が山西省に次で多いが，近代産業は少ない。なお，昨 2013 年に洛陽市嵩県で埋蔵量 40t の金鉱が見つかった。金の可採年数は 42 年と伝えられている。

二　河南省に置かれた歴代の都

☆ 黄河文明の発祥

現在の研究成果では，黄河文明は長江文明と相互干渉しつつも互いに独立して発展したと考えられている。黄河中流域の中原の地に，最初に国家規模の文化を築いたのはどの民族であったかは，今のところ推察の域を出ていない。商(殷)に先立って夏という国家があったということは，ここ半世紀来の発掘調査の結果，ほぼ確定している。この夏を立てたのはどんな民族であったかについては，いろいろな推察がなされている。

一方，長江中流域の彭頭山の稲作遺跡で見られるBC7000年ごろに長江文明を興した民族は，後に三苗と呼ばれ，今は貴州省の山地に多く住む苗族の祖先であろうと推察されている。長江下流域ではBC5000～4500年の河姆渡遺跡に見られるように，百越と呼ばれた民族が稲作文化を継承していたと想定されている。

BC6000年からBC2000年ごろまで続いた，縄文海進といわれる地球が温暖な時期があり，中原の地にも水牛など南方系の動物が住み，黄河の氾濫原は稲作に適していたと思われる。苗族の祖先を含む南方の水稲耕作民も，中原の地に進出していたと考えてもおかしくない。

史書などに書かれている伝説では，(華)夏族を率いる黄帝と三苗族を率いる蚩尤(Chīyóu)は，幾多の戦いの末に冀(Jì)州の台地涿鹿(Zhuōlù)で戦い，華夏族はこれに勝利して国を建てたとされている。先進的な武器で苗族の祖先を圧倒したのかもしれない。ただ，蚩尤の種族を表す姓は羌(Qiāng)だという説もあり，それだと蚩尤は苗族ではなく羌族で，黄帝の率いる華夏族に対抗して連合を組んでいたのかもしれない。

一方，苗族の語り伝えによれば，祖先が黄帝の子孫に破れて，南方に逃れたとなっている。もっともこれは黄帝伝説が伝わって来たのかもしれない。

華夏族は史書では漢民族の祖先であるとされていて，河南省北部や山西省および陝西省に拠点を置く仰韶文化や龍山文化の担い手の後裔だったのであろうか。

なお羌姓は字から解るように羊を飼う種族を意味しているので，遊牧から農耕牧畜民に転じた種族であろう。商(殷)を倒した周の武王に従った太公望の本名は呂尚，通称は羌姓の羌子牙であり，犠牲狩りなどで商(殷)に弾圧されていた羌族の代表として商(殷)の討伐に加わったと考えられている。

☆ 上古代

BC1800～BC1600年頃に，夏の都が洛陽郊外の偃師(Yǎnshī)市二里頭村に存在したという可能性が非常に高い。伝説によると，夏は黄帝から堯(Yáo)・舜(Shùn)と続く伝説の五帝の後の王禹(Yǔ)が立てた国と言われ，禹は黄河の治水で名をなしたとされる。この夏は桀(Jié)王の時に，商(殷)の湯王に滅ぼされた。

商(殷)も都はまず亳(Bó:偃師市)に置き，次に鄭州市辺りに移し，その後黄河の南北のあちこち移動し，王朝後期のBC1400年頃に商邑(Shāngyì：安陽市)に移したと見られているが，王朝前期の状況については，文字が書かれた遺物がまだ発見されていないので，半分は霧の中である。

2004年に偃師市の商城内で大規模な人工池の遺跡が発見され，酒池肉林の伝説が現実に近くなった。

☆ 西周・春秋戦国

史書の記載によると，商(殷)末期に中央の政府から離れた地の陝西省に拠点を持つ，西伯と言われた周の武王が，商(殷)の紂(Zhòu)王を討って，故地である西安市付近の鎬京(Hàojīng)を都と定めた。黄河中下流域は，武王の弟の周公旦が魯国を治め，河口域は商(殷)の討伐に役立った太公望が齊国を治めた。

周王朝は，やがて北方狩猟民族の犬戎(Quǎnróng)に一旦滅ぼされ，BC770年に都を成周(洛陽)に移して東

周となった。これより春秋時代が始まる。

春秋戦国時代は，各地に封じられていた諸侯がお互いに淘汰した時代である。河南省は洛陽の周王朝と同姓(姫)の衡･曹(Cáo)･鄭などの小国が多く，北の強国晋や南方の楚(苗族？)などの草刈り場となった。

晋が六卿の魏(Wèi)･趙･韓に分裂したBC403年から戦国時代に入った。河南省の北部や中部は周および戦国の七雄の魏と韓および商(殷)の名残りの宋などに分割されていた。南部にあった小国はほとんどが楚に滅ぼされてしまった。

☆ 秦･漢

約550年続いた春秋戦国時代は，西方の大国であった秦の始皇帝(嬴政)によって，BC221年に終わりを告げた。東は黄海沿岸から西は蜀(Shǔ:四川省)，北は万里の長城から南は長江流域を越えて，それまでの中国大陸史上最大の版図を築いた。さらに馳道(chídào)と名付けられた軍用道路を支配地内だけでなく，南部の山岳地帯まで通し，雲南･貴州･広西･広東など苗族や百越の地域も征服し，桂林や広州に郡都を置いた。

秦の都咸陽からの黄河沿いの馳道は，河南省を一直線に突っ切って山東半島の琅琊(Lángyá)に至っている。河南省は秦の地方統治組織の36郡の内，三川(洛陽)･河内･穎川(Yǐngchuān)･南陽･陳などに分けられていた。

秦は始皇帝の死と共に終わりを迎え，全国統一後わずか3代でBC206年に滅びた。

漢の劉邦は，楚の項羽にBC202年の垓下(Gāixià)の戦いに打勝ち，秦の遺産を基本的に継承して約400年間の漢王朝が成立した。項羽が咸陽の阿房宮を燃やしてしまったため，漢は都を近くの長安に置いた。洛陽は周時代と同じく副首都と扱われていた。途中15年の新を挟み東漢(後漢)になると都は洛陽に移された。

☆ 三国･晋･五胡十六国･南北朝

東漢末に，涼州隴西(甘粛省)出身の暴れ者董卓(Dǒngzhuó)は，武力を背景に朝廷を乗っ取り，洛陽の街は略奪の結果焼け野原になった。三国演義はここから物語が始まる。

諸侯の連合軍が董卓を倒した後，曹操は鄭州の南50余kmにある許昌に東漢の献帝を移して，暫定的に都とした。曹操の死後220年に，子の曹丕(Cáopī)は禅譲を受けて魏を建国し，都を洛陽に戻した。265年に魏の晋王で相国であった司馬炎(武帝)が禅譲を受けて晋を起し，都は洛陽に置いた。

その後，戦力を蓄えた晋軍が腐敗と頽廃の極にあった呉に進攻し，280年に建業(南京)を陥し，100年に亘る三国の時代は終わった。

全国統一がなると(西)晋の武帝は急速に昏君(暗愚な君)と化し，東漢と同じく外戚が政治を壟断する事態に陥った。その混乱が続いて八王の乱を惹き起こし，統治下にあった匈奴(Xiōngnú)が304年に独立して漢(後に趙)と名乗った。

311年に漢軍の大規模攻撃で洛陽は焦土と化し，時の晋の懐帝は漢の都平陽(山西省臨汾)に拉致され，奴隷の扱いを受け，(西)晋王朝は終わりを告げた。形の上では長安の地方政権として残っていた最後の皇帝が317年に殺されるまで(西)晋は存続した。

318年に司馬一族の安東将軍司馬睿(Ruì)は建康(建業から改称)に東晋の都を置いて，呉から続く六朝(南朝)時代に入ったことにより，東漢時代から続いていた河南省の都はなくなった。その後かつての西晋の地は，あちこちで王朝が次々と入れ替わる五胡十六国時代が150年近く続いた。

五胡とは匈奴･鮮卑(Xiānbēi)･羯(Jié)･氐(Dī)･羌の西方および北方民族で，十六国とはこの五胡と漢族(華夏族)が建てた主な国を指す。その中の後趙･前燕(Qiányán)と十六国外の冉魏(Rǎnwèi)が，一部が河南省安陽に

かかる河北省南部の鄴(Yè)に都を置いた。

五胡十六国時代の最後に近い386年に鮮卑族の拓跋(Tuòbá)氏が蒙古で北魏を建国した。398年に山西省大同に都を置き，439年に北涼を滅ぼし南北朝時代の幕明けになった。北魏は仏教が盛んで，雲崗石窟を彫った。493年に都を洛陽に移し，河南省はふたたび政治の中心地に浮上した。石窟も龍門に移った。

北魏はその後，534年に東魏と西魏に分裂し，それぞれの実力者が政権を簒奪して北斉と北周になった。西魏と北周は長安に都を置いたが，東魏と北斉は鄴を都にしたので，鄴は五朝の都と言える。

☆ 隋･唐

577年に北周が北斉を滅ぼし，581年に北周の相国だった楊堅が禅譲を受けて隋を興した。都は長安のままであった。589年に隋は南朝の陳を滅ぼし，全土を統一した。2代皇帝煬帝は洛陽を東都とし，長安の建設や天津の海河から淮河や長江までの運河を開鑿させたり，度重なる遠征で民を疲弊させた。

618年に煬帝が逃亡先の江都(揚州)で殺されると，李淵(Yuān)が禅譲を受けて長安を都に唐を建てた。

武則天が策略を弄して唐の3代皇帝高宗の皇后となり，690年に皇帝となった。国号は(武)周とし，都は一時洛陽に移された。なお，五胡以来の王朝はすべて異民族と言われており，中原の言葉はその影響を受けて，上古漢語から中古漢語へと大きく変貌した。

☆ 五代十国･北宋

唐末の黄巣の乱の残党の朱全忠が，907年に唐の哀帝より禅譲を受けて後梁を建て，汴州(開封)を都とした。唐代に各地に配されていた節度使も独立し，北方は五代，南方は十国となる。

突厥(Tūjué)の後唐は923年に後梁を滅ぼし，洛陽を都とした。後唐を936年に滅ぼした後晋は，晋陽で建国したがすぐに都を開封に移した。946年契丹(Qìdān：遼)が開封を陥し，後晋は滅びた。947年晋陽で建国した後漢もすぐに開封を都にした。後漢は建国後すぐの950年に後周に取って替られた。後周も開封を都とした。

960年に後周の幼帝から禅譲を受けた宋の太祖も都を開封に置き，五代は終わる。宋は979年に十国最後の北漢を滅ぼし，黄巣の乱以来の100年におよぶ乱世は終わり，都開封は未曽有の繁栄を誇った。

☆ 南宋･金･元以降

遼(契丹)を滅ぼした女真(満州)族の金が1126年に開封を攻め落し，8代徽宗と9代欽宗は北に拉致され，(北)宋は終わった。水滸伝の時代である。金は燕京(北京)に都を移し，1214年に燕京から開封に遷都した。

一方，宋は淮河以南に押し込まれ，長江を渡った臨安(杭州)を都として南宋を建てた。

次に金を滅ぼして南下した元は，大都(北京)に都を置いたので，河南省はこれ以来政治の中心から完全に外れてしまい，近代以降は海外との交易や人の移動が便利な沿岸部に日が当たるようになった。

三　洛陽（★は見学する個所，以下同じ）

洛陽は洛水の北岸に出来た都市で，京都のように周囲を山に囲まれ，鄭州を要とする黄河扇状地の反対側の部分に位置する。このため古来交通の要衝となった。(西)周代から長安の副都として機能し，東周(春秋戦国)時代や東(後)漢･魏(三国)･(西)晋･北魏･隋･唐(武周)･後梁･後唐など多くの王朝の都が置かれ，九朝の都と言われている。なお，隋と唐は主に長安に都があり，洛陽は短期間である。

ただ，戦乱に伴う破壊がたびたび起ったので，発掘されたもの以外は，古い遺跡はあまり多くない。

★ **龍門石窟**（世界遺産）

北朝の北魏は仏教が盛んで，すでに平城（今の大同）に都があったときから，雲崗石窟を約 40 年に亘り彫り続けた。都が洛陽に移ってからも，石窟は洛陽郊外の龍門に場所を移し，唐代に至るまで約 400 年彫り続けられた。

洛陽の南郊外の伊水の両岸の玄武岩に 1km にわたり彫られた洞窟と仏像は，世界文化遺産となっている。大洋の海底や火山で生成された玄武岩は，雲崗石窟の砂岩とは異なり，材質が固く，長年の風雨によく耐えている。

龍門石窟を代表する盧舎那佛

★ **白馬寺**

白馬寺は洛陽の東の郊外にあり，東（後）漢の 68 年に建立された中国で最初の仏教寺院である。白馬寺にある 13 層の塔は 1175 年に再建されたものである。空海もこの寺で研鑽を積んだとされる。なお，北魏時代の洛陽には仏教寺院が 1,367 もあったと伝えられている。

また，洛陽は牡丹で有名で，白馬寺の境内にもたくさん株が植わっている。

白馬寺の入り口と牡丹

★ **関林廟**

洛陽市街から南東の郊外に，『三国演義』の英雄関羽の首が曹操によって埋葬されたとされる関帝廟がある。

関帝廟は中国各地どころか世界中にあり，横浜の中華街にも

美髯（rán）公関羽

あるが，ここと関羽の生れ故郷山西省運城にある解州関帝廟，および関羽の胴が葬られたとされる湖北省の当陽関陵が，三大関帝廟として有名である。

★ 周王城天子駕六博物館

2002 年に洛陽中心部に王城広場を建設するときに春秋期の墓が発見され，2004 年に博物館として開館した。発見されたのは東周時代の墓 600 以上と 29 個の車馬坑で，5 号車馬坑が突出して大きく，長さ 42.6m，幅 7.4m あり，26 輌の葬儀車とそれを引く 70 匹の馬が見つかった。これにより，天子の車は 6 頭立てという『礼記』の記述が証明された。

6 頭立て馬車

★ 洛陽牡丹園

洛陽には 10 余の牡丹園があり，花の季節の 4 月中旬～5 月上旬は牡丹祭りということで，多くの観光客で賑わう。季節の進行が早ければ花が見られるので，開花情報によって立ち寄り先を決める。

☆ 漢魏故城遺址

白馬寺の近くで発見された三国の魏の都の跡の一部である。城壁は一周 14km もあったそうである。一帯は田地なので，石碑が建っているのをバスから見る予定。

☆ 洛陽博物館

最近新装した博物館であるが，同じような展示が鄭州の河南博物院で見られるので，立ち寄らない。

四　鄭州

鄭州は非常に古い都市であると共に，第一節の地誌で触れたように，古代からの交通の要衝の地である。鄭州の市街地の南方 25km の地に新鄭市がある。ここには春秋時代に楚と晋の南北の二大強国の間で二股膏薬をやった鄭の都があった。さらに鄭を滅ぼした戦国の七雄のひとつ韓も都を置いた。これにより 2004 年中国古都学会は従来の七大古都に鄭州を加えて八大古都とした。河南省には八つの内今回行く四つがある。

★ 河南博物院

河南博物院は，現在中国大陸にある九つの博物院の中でも，北京紫禁城の故宮博物院に匹敵する水準の 12 万点余りの収蔵物を誇っていて，中国最古の博物館のひとつでもある。

国外ではあまり展示されたことがないものも多く，3,000 年以上の歳月を経ても観る人に迫ってくる青銅器などの展示品を見る。

ここでは楚の荘王が行った「鼎の軽重を問う」(楚子問鼎之大小輕重焉。對曰，在德不在鼎。～今周德雖衰，天命未改。鼎之輕重，未可問也。) という問答を思い起してほしい。

商代遺跡から出た杜嶺方鼎

☆ 鄭州商城遺跡

鄭州の市街地の真下には，商(殷)の初期の遺跡ではないかといわれる二里崗文化の遺跡が眠っている。市街地の開発のために地面を掘り起こすたびに遺跡調査が行われているが，まだ全容は明らかになっていない。発掘後は埋め戻してしまうので，一部を除いて見ることはできない。

1970年に発見された後，すでに発掘済みの鄭州商城遺跡は商代中期の遺跡で，発掘調査された範囲では，南城壁と東城壁が約1,700m，西城壁が約1,870m，北城壁が約1,690mの版築で造られた大型の城壁に囲まれている。バスから見る予定。

☆ 黄河遊覧区

あまり見所がない鄭州では，市の西北20kmの黄河沿いに地質公園としての遊覧区が作られた。この辺りで黄河は黄土高原を流れる中流域から華北大平原の下流域になる。炎・黄二帝の顔像や黄河碑林，万里黄河第一橋などの設備が作られている。時間の関係で立ち寄らず，「黄河入海流」はバスからの橋上見学とする。

五　安陽

安陽は省都鄭州から北に約 170km の黄河北側の河南省北部にある。殷墟の外には目立った観光対象はなく，市街地北側に北洋軍閥の創設者で辛亥革命後中華民国の臨時大総統になった袁世凱の墓袁林がある。

さらに，殷墟の北方 10km ほどの西高穴(xué)村で発見された墓が曹操の陵墓であると，2009 年末に発表されている。前節で紹介した古都鄴の一部がかかっていることから，七朝の都と呼ぶ人もいる。

殷墟宮殿宗廟遺址

★ 殷墟(世界遺産)**および殷墟博物館**

甲骨文字が刻まれた龍骨と呼ばれた土中から発掘された骨片は，以前の中国ではマラリアの特効薬として持て囃されていた。金石学者の王懿栄(Yì róng)は，この刻みが青銅器などに刻まれていた金石文に似ていると思い，大量に龍骨を買求めた。

彼の死後，金石学者羅振玉は龍骨が小屯村(安陽市郊外)より出土したことを突き止め，甲骨文字の解読を進めて，伝説上の存在と考えられていた商(殷)王朝の遺構ではないかと推察した。その後，王国維が『竹書紀年』や『史記』などの歴史書の記載と甲骨文字を照らし合わせるという研究を進め，商(殷)王朝第 19 代の盤庚(Xuán'gēng)が遷都した後の商(殷)の都の跡地であるという説を立てた。

甲骨文字

1928 年から始まった発掘により，巨大墳墓の存在が明らかになり，15 万件もの甲骨片が見つかっている。なお，殷墟は宗教的な物で，すぐ北にある洹河(Huánhé)の対岸で 2000 年に見つかった「洹北商城」が本来の都

である，という学説も出ている。殷墟博物館は殷墟の中に建てられており，殷墟からの発掘品が展示されていて，文書に残る商(殷)代の国の規模と隆盛が想像される。

六　開封

開封は鄭州の東約 70km に位置し，前述のように七朝の都と言われている。さらに，2013 年秋の中国古都学会の研究発表では，BC2020 年ころに夏の第 7 代王の杼将(Zhùjiàng)が老丘(開封市郊外の東約 20 余 km にある国都里村一帯)に都を置き，200 年ほどの間続いたという学説が出され，八朝の都になるかもしれない。

開封は「通濟渠(Tōngjǐqú)」(別名:汴河)沿いに開かれた街で，汴京(Biànjīng)とも呼ばれていた。通濟渠は隋の煬帝が開いた黄河と淮(Huái)河を結ぶ運河である。なお，『清明上河圖』で描かれている川はこの 汴河である。なお，宋代の市街は度重なる黄河の氾濫で，現在は地下 11m に埋まっているという。宋の東京開封府時の人口は 50 万～100 万と言われ，約 1 億と想定される全土の人口の 1/20～1/10 を集めた大都会であった。

唐の都長安は，城壁と同じような壁で回りを囲まれた「坊」という単位を縦横に並べた条坊都市であった。坊の門は城門とおなじく夜の間は閉ざされてしまったので，「坊」ごとに別の街といった感じであった。日本の平城京や平安京は長安をまねて作られたが，坊の壁はおろか都を囲む城壁すらない。

一方，開封は坊の壁を作らなかったので，都市全体が不夜城のようになり，経済や文化は大いに発展した。科挙に合格した官僚(士大夫という)が実権を持ち，法治が定着し，遼(契丹)・金や蒙古(元)の侵攻がなければ，世界で最初に中世から近世へ変わる可能性があったと言える。中国の四大発明と言われるものの中で，羅針盤・黒色火薬・活字印刷(木版印刷は唐代の発明)が宋代に発明されたのも，その証しと言える。

★ 清明上河園

2012 年 1 月に上野の東京博物館で公開された『清明上河圖』に描かれている北宋時代の開封の街並みを，1998 年に再現・建設されたテーマパークである。

『清明上河圖』は，北京の首都空港にその拡大図が掲げられているので，博物館に足を運ばなくても知っている人は多いであろうが，3 時間並んで 5 分だけ見た実物は，25cm 幅の 5.3m 長の巻き物であった。模写もたくさんあり，日本にも何点か伝来している。

清明上河圖の虹橋の部分

★ 鉄塔

開封で北宋代の姿を留めているものでは，984 年に建てられた天清寺の「繁塔」と 1049 年に建てられた開宝寺の 8 角 13 層の「鉄塔」と呼ばれる琉璃塔が有名である。

「繁塔」は煉瓦造りの舎利塔で，もともと 9 層であったが，明代に上部が取り壊され 3 層が残るだけだが，開封に現存する最古の建造物である。

「鉄塔」は高さ 55.63m で，中国に現存する古塔ではいちばん背が高い。外壁は一枚一枚仏像が彫られてい

る紅褐色の琉璃煉瓦で覆われていて，鉄錆色に見えるので，この通称が付いている。

★ 宋都御街

宋代の街を描いた作品には，『清明上河圖』だけでなく南宋の孟元老がかつての開封府を回想した『東京夢華録』という書物もある。

宋都御街は，そこに書かれている皇室専用の御道を模して 1988 年に造られた，長さ 400m，幅 30m の一種の古文化街である。

宋都御街

★ 包公祠

凡そ中国人で包公を知らない人はいないであろう。包公(本名包丞，包青天とも呼ばれている)は，北宋第 4 代皇帝仁宗(1022－1063)の時に活躍した盧州(安徽省)合肥の人で，1027 年に 29 歳で進士に合格した。右司郎中で東京開封府尹(yǐn)を兼任していた時，宮中の宦官(太監)や皇族・貴族などの権力者を恐れずに収賄を摘発した，ということが正史である宋史の包拯伝に書かれている。

正義の人包青天のテレビドラマは，日本の水戸黄門や大岡越前守などと同じく何回も放映されていて，中国人社会では人口に膾炙されている。1987 年に作られた包公祠には，ドラマに出てくる龍頭鍘・虎頭鍘・狗頭鍘が置いてあり，山西平遥でも観たが，「公堂審訊」場面の寸劇が観られるかもしれない。

よく知られている京劇の演目『秦香蓮』中の『鍘(zhá)美案』では，科挙に状元で合格した陳世美が，故郷の糟糠の妻秦香蓮と二人の子供を捨てて附馬となっているのを，包青天が重婚と皇帝を欺いた罪で，妻の公主の面前で処刑する。ここで使われるのが，先に処刑して後から上奏することを許されている龍頭鍘である。

包公が使う三つの鍘

☆ 大相国寺

南北朝時代の 555 年の開基で，戦国の四君子の一人である魏の信陵君の故居跡に建てられた。一旦は荒廃したが唐代に再建され，宋代は汴京一の大寺であった。寺は兵火や大火に見舞われただけでなく，開封の北側を流れ，たびたび氾濫する黄河の洪水によって，明末には破壊された。そのため，唐・宋代に建立された元の姿はない。清代の 1776 年に大修復されたのが現在の寺である。今回は時間の都合で寄らない。

☆ 龍亭公園

広大な龍亭公園は宋・金代の皇帝の御苑で，明代の周王府の跡地である。現在の建物は 1948 年に修復されたものである。公園内に万寿宮大殿という宮殿があり，当時の皇帝の玉座が再現されている。

以上

文責　校友会旅行委員　猪飼